

荒平古墳群 1

— E群 2号墳・3号墳調査の報告 —

2009

福岡市教育委員会

序

福岡市は、豊かな自然環境と地理的条件にも恵まれ、古くから大陸の先進文化を受け入れる窓口として栄えてきました。市内には最古の稻作の村である板付遺跡、古代の迎賓館である鴻臚館、貿易都市博多などの貴重な文化財が残されています。福岡市教育委員会では、開発工事に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存と保護措置に努めているところです。

今回の調査では、2基の古墳が調査され、この地の古墳時代の歴史を解明する上でたいへん貴重な発見となりました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査において費用負担をはじめとするご協力を賜りました社会福祉法人 敬養会様に厚くお礼申しあげます。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　言

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が平成19(2007)年度に早良区東入部2丁目16番17号で実施した荒平古墳群E群第2号墳、第3号墳の発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は福岡市教育委員会が行い、調査担当者は加藤隆也である。
- (3) 2号墳の実測は今井隆博が行い、その他は加藤が行った。写真撮影は加藤が行った。
- (4) 出土遺物の整理作業は加集和子が行った。
- (5) 出土遺物の実測と写真撮影は加藤が行い、浄書は加集が行った。
- (6) 本書に使用した方位は磁北であり、今回の調査・報告に係る標高は、道路台帳平面図上の「入部老人いこいの家」前面道路高38.8mを基準として使用している。
- (7) 本書で使用したX線写真・顕微鏡写真は、福岡市埋蔵文化財センターの協力を得た。
- (8) 調査に係る記録類、出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵・保管し、活用していく予定である。

遺跡調査番号	0722	遺跡略号	AHK-E-1
地番	福岡市早良区東入部2丁目16番17号	分布地図番号	入部85
調査対象面積	1.717m ²	調査面積	古墳2基
調査期間	平成19年7月2日～平成19年8月18日		

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1	第Ⅲ章 調査の記録	3
1. 調査に至る経緯	1	1. 2号墳の調査	3
2. 調査の組織	1	2. 3号墳の調査	11
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境	1	3. まとめ	16

挿図目次

Fig. 1 荒平古墳群の周辺遺跡 (1/6,000)	Fig. 9 2号墳石室内出土遺物実測図2 (1/2, 1/4)
Fig. 2 荒平古墳群E群古墳配置図 (1/2,000)	Fig. 10 2号墳周辺出土遺物実測図 (1/4)
Fig. 3 現況測量図および石室位置図 (1/150)	Fig. 11 3号墳石室実測図 (1/60)
Fig. 4 地山形成測量図 (1/150)	Fig. 12 3号墳石室内出土遺物実測図 (1/2, 1/4)
Fig. 5 2号墳埴丘遺存状況図 (1/100)	Fig. 13 3号墳石室内出土位置図 (1/40)
Fig. 6 2号墳石室実測図 (1/60)	Fig. 14 3号墳埴丘出土遺物実測図 (1/4)
Fig. 7 2号墳石室内遺物出土位置 (1/40)	Fig. 15 2号墓道3号周溝部出土遺物実測図 (1/4)
Fig. 8 2号墳石室内出土遺物実測図1 (1/4)	Fig. 16 調査区周辺遺物 (1/2)

図版目次

PL. 1	1) 調査前状況 (南東から) 3) 2号墳全景 (西から) 5) 2号墳石室全景 (西から) 7) 2号墳玄室内遺物出土状況 (北西から)	2) 2号墳調査前状況 (北西から) 4) 2号墳羨道前状況 (西から) 6) 2号墳玄室全景 (西から) 8) 2号墳玄室内遺物出土状況 (南西から)
PL. 2	1) 2号墳石室調査状況 (西から) 3) 2号墳奥壁状況 (西から) 5) 2号墳玄室左側壁状況 (南から) 7) 2号墳外護列石検出状況 (南東から)	2) 2号墳樋石検出状況 (西から) 4) 2号墳玄室右側壁状況 (北から) 6) 2号墳埴丘土層 (西から) 8) 2号墳南側斜面断割り状況 (北東から)
PL. 3	1) 3号墳確認状況 (南東から) 3) 3号墳全景 (南西から) 5) 3号墳周溝検出状況 (東から) 7) 3号墳羨道完掘状況 (南西から)	2) 3号墳調査状況 (南西から) 4) 3号墳玄室全景 (南西から) 6) 3号墳周溝土層堆積状況 (北から) 8) 3号墳羨道左側遺物出土状況 (南東から)
PL. 4	1) 3号墳全景 (北東から) 3) 3号墳右袖遺物出土状況 (北から) 5) 3号墳羨道部状況 (南西から) 7) 3号墳左側壁状況 (南東から)	2) 3号墳右袖遺物出土状況 (北東から) 4) 3号墳右袖隅角遺物取り上げ状況 (北から) 6) 3号墳玄室右側壁状況 (北西から) 8) 3号墳羨道状況 (南東から)
PL. 5	出土遺物 (縮尺不統一)	
PL. 6	出土遺物 (縮尺不統一)	

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成19年4月13日、社会福祉法人敬養会より福岡市早良区東入部2丁目16番17号における特別養護老人ホーム建設計画に先立って、埋蔵文化財の有無についての照会が埋蔵文化財課事前審査係に提出された。計画地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である荒平古墳群E群にあたり、古墳1基（第2号墳）の存在が確認されていた。協議を重ねた結果、この古墳を発掘調査により記録保存することとなった。発掘調査は平成19年7月2日から測量と表土剥ぎ作業を始めたが、途中事業地内に更に小規模古墳1基の存在が確認され、第3号墳として追加調査を行った。8月18日に全ての調査を終了した。

発掘調査から整理・報告にいたるまで、施主の社会福祉法人敬養会様をはじめ関係者の皆様のご理解と共に、多大なご協力を賜り順調に作業が進み報告書を作成することができました。ここに記して謝意を表します。

2. 調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査委託者	社会福祉法人 敬養会
調査主体	福岡市教育委員会
調査総括	文化財部埋蔵文化財第2課長 力武卓治（前任）
	文化財部埋蔵文化財第2課長 田中壽夫（現任）
	埋蔵文化財第2課第1係長 杉山富雄
事務担当	文化財管理課 井上幸江
調査担当	埋蔵文化財第2課 加藤隆也
調査作業	芦馬光夫 岩永いさ子 尾崎泰正 小田義之 川岡涼子 川嶋京子 田中昭子 永井ゆり子 野田英機 土生ヨシ子 松尾和子 脇山千代美
整理作業	加集和子

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

荒平古墳群は、福岡市南部の油山（標高597m）西側に位置する荒平山（標高394m）から更に西に向けて派生した丘陵に位置する。荒平山の裾部には古墳群が築造されており、現在荒平古墳群がA群からし群に分けられ、現在30基以上の古墳の存在が確認されている。この古墳群の西側には、早良平野が広がっており、縄文期より人々の活動の場となっている。今回調査を行ったE群の西側には東入部遺跡が位置している。東入部遺跡では、弥生時代中期の青銅器や鉄器の副葬品を有し溝で区画される木棺墓、甕棺墓が検出されており、当該期の首長の墓と考えられている。古墳時代では集落の形成がみられ、荒平古墳群F群は東入部遺跡の中の微高地に形成されている。本古墳群の被葬者は東入部遺跡周辺を中心に活動した人たちであろうと考えられる。また、古代においては唐三彩なども出土し、官衙的色彩の強い大型建物群や製鉄関連遺構もみられ、前代からの人々が築いてきたものを基盤として更に発展させていくのである。

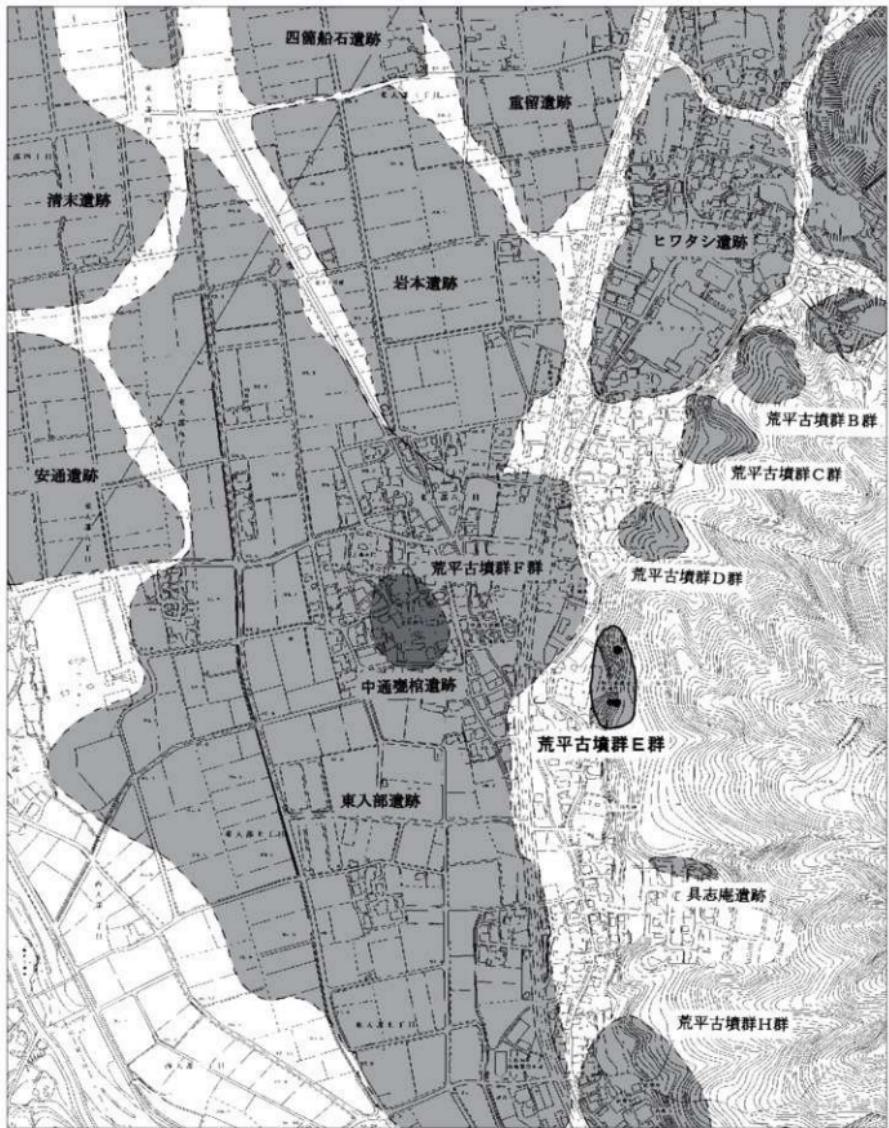


Fig. 1 荒平古墳群の周辺遺跡 (1/6,000)

第Ⅲ章 調査の記録

1. 2号墳の調査

(1) 位置と現況 (Fig. 3, PL. 1)

2号墳は、西側へ緩やかに延びた尾根から一段奥に入った位置に立地する。調査前の現状は墳丘の高まりの一部がみられ、石室部は天井石が抜き取られ大きく陥没しており、列石の一部が確認できる状況であった。奥壁北側には松の大木が根を張っており、安全な作業を行なうため根の抜き取りは行わなかった。尾根との境界部には、東西方向に歩道状の削平と排水溝がみられた。

(2) 墳丘 (Fig. 5, PL. 1)

墳丘の北側は盛土が比較的良好に遺存しており、Aトレンチで玄室中心から6.5mの位置まで旧地表土がみられ、墳端と考えられる。Bトレンチでは列石と盛土との遺存が確認できた。南側の墳丘は大きく削平され、盛土が流出しており、表土直下は地山であった。削平が著しいこともあるが墳丘の山側において周溝の可能性がある掘り込み等はみられなかった。墳丘は北側緩斜面の谷部を埋めていく方法で築かれたものとみられる。渓道入口部には地山内の自然石が露頭しているが、その左脇には列石が配置されていることから、自然石露頭部分を含めて石室の一部として構築されていると考えら

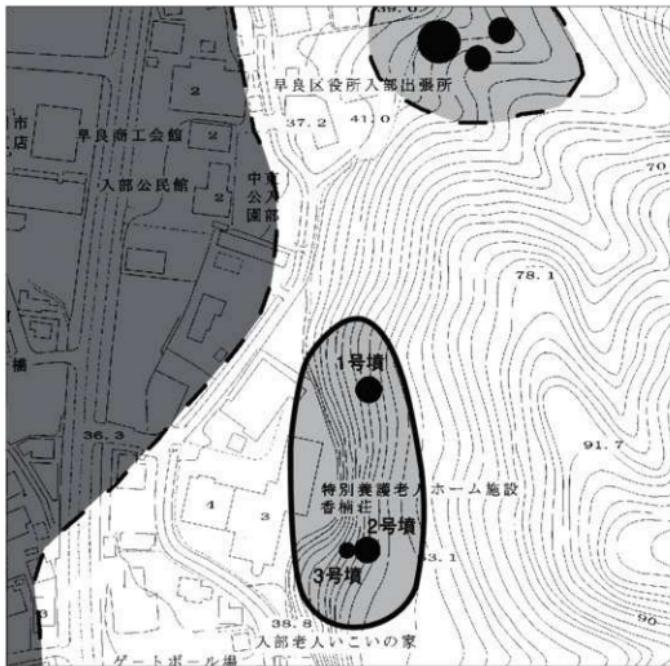


Fig. 2 荒平古墳群E群古墳配置図 (1/2,000)

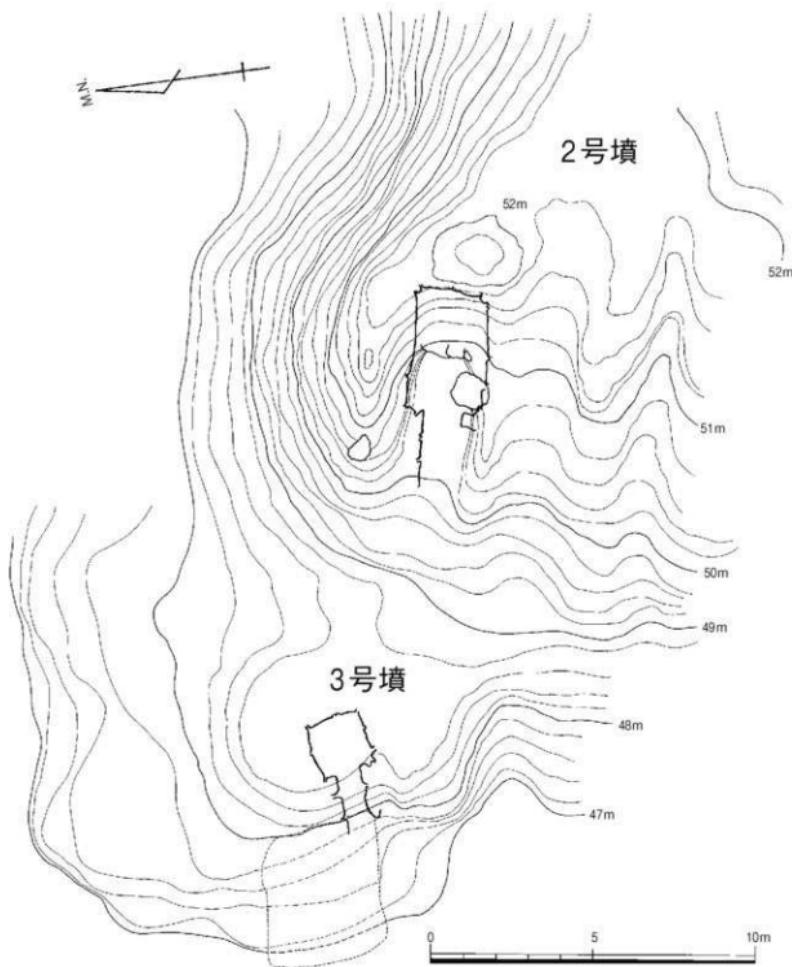


Fig. 3 現況測量図および石室位置図 (1/150)

れる。以上のことから墳丘は、玄室のほぼ中央部を基点に半径約6.5mのプランに復元される。

地山成形 (Fig. 4, PL. 1)

Fig. 4 にみられるように北西方向から地山を削り込んでいる。山側を主に成形しており、谷側には旧地表土が遺存することから、顕著な成形は行われていない。この時点で、羨道入口部の自然石は露頭しているはずであり、どの段階で自然石を羨道の一部として設計計画内に取り込む決定をしたかは不明である。

盛 土 (Fig. 5, PL. 1, 2)

盛土状況が良好に遺存するAトレンチの観察では、締まりのない黒褐色を呈する旧地表土の上層に

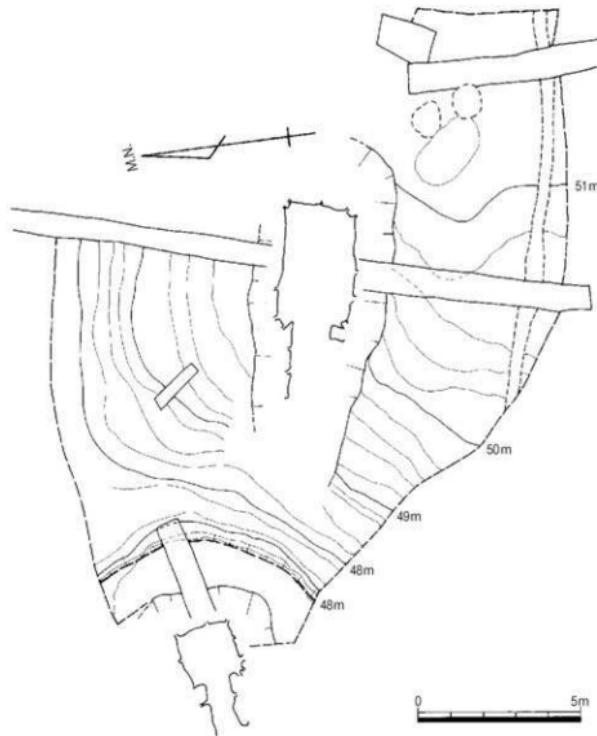


Fig. 4 地山成形測量図 (1/150)

表土と同質な層が覆い、その上面に黄褐色粘質土と黒灰色土で平坦面が造られている。その上面の状況は黄褐色砂質の地山土と黒色を呈する砂質土を互層にして重ね、厚みは水平もしくは石室掘方へ層厚を増して積んでいる。天井石付近とそれ以上の墳丘状況は、墳丘の遺存が無く不明である。Bトレーナーでも旧地表面に盛土を積み上げている状況が確認された。

外護列石 (Fig. 5, PL. 2)

墳丘北側に40~120cm程の花崗岩礫1ないし2段がみられ、玄室中心から約6.3mの弧線状に配列している。部分的な遺存であるが、この部分のみに構築されたと考えられ、丘陵下方への墳丘崩壊を防止する目的と考えられる。また、墳丘盛土内では、列石等の構造物等は確認されなかった。

(3) 埋葬施設 (Fig. 6, PL. 1)

主軸方位をN(磁北)-78°-Wにとり、西に開口した両袖横穴式石室を内部主体とする。玄室、羨道部石積部までで、自然石露頭部を含めなければ全長は580cmを測る。

石室掘方 (Fig. 5)

奥壁側にやや広く、羨道部が窄まる隅丸長方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれている。深さは約90cmを測る。

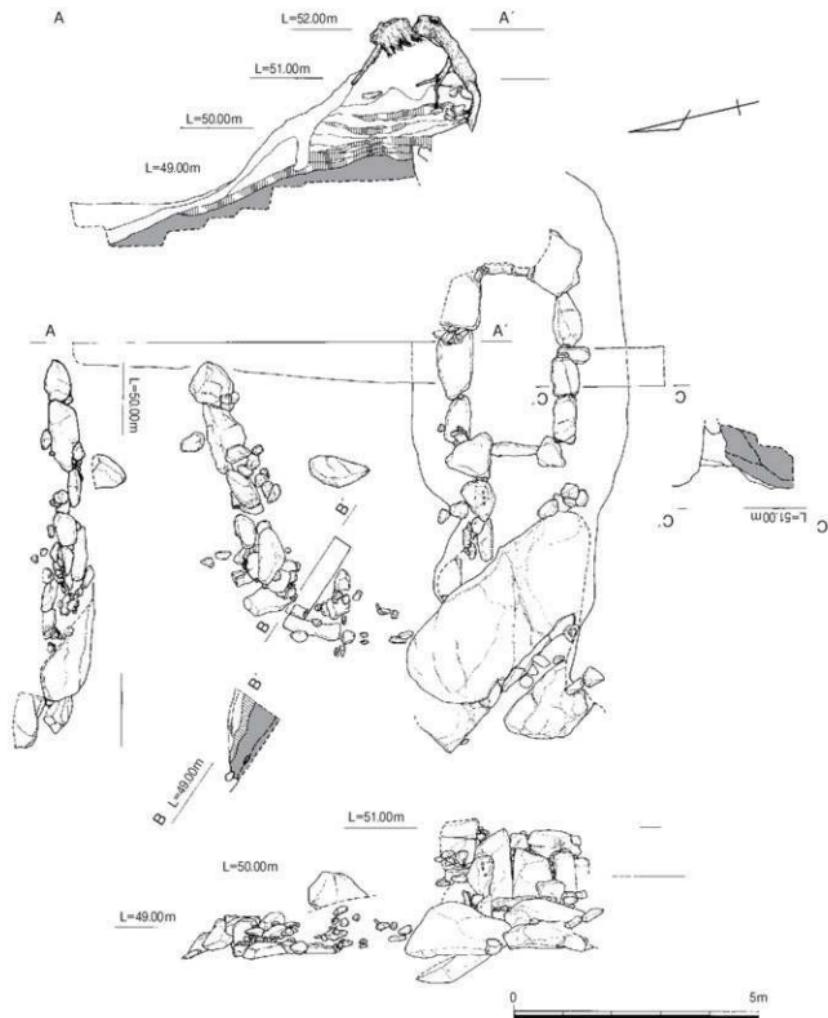


Fig. 5 2号墳埴丘遺存状況図 (1/100)

玄室 (Fig. 6, PL. 1, 2)

奥幅212cm、前幅220cm、右側壁長360cm、左側壁長366cmを測る。奥壁は大型の石を2石継に配置し、奥壁左隅は比較的剛石が良好に保たれているのに対し、右隅では2石目に力石が据えられている。右側壁には3石の腰石を、左側壁には2石の腰石を配置する。玄室床面には20~40cm大の扁平な河原石を用いて敷き詰めている。玄室最奥部と右袖部に敷石がみられない部分があるが、中世期遺物の出土もあり、その要因は不明である。

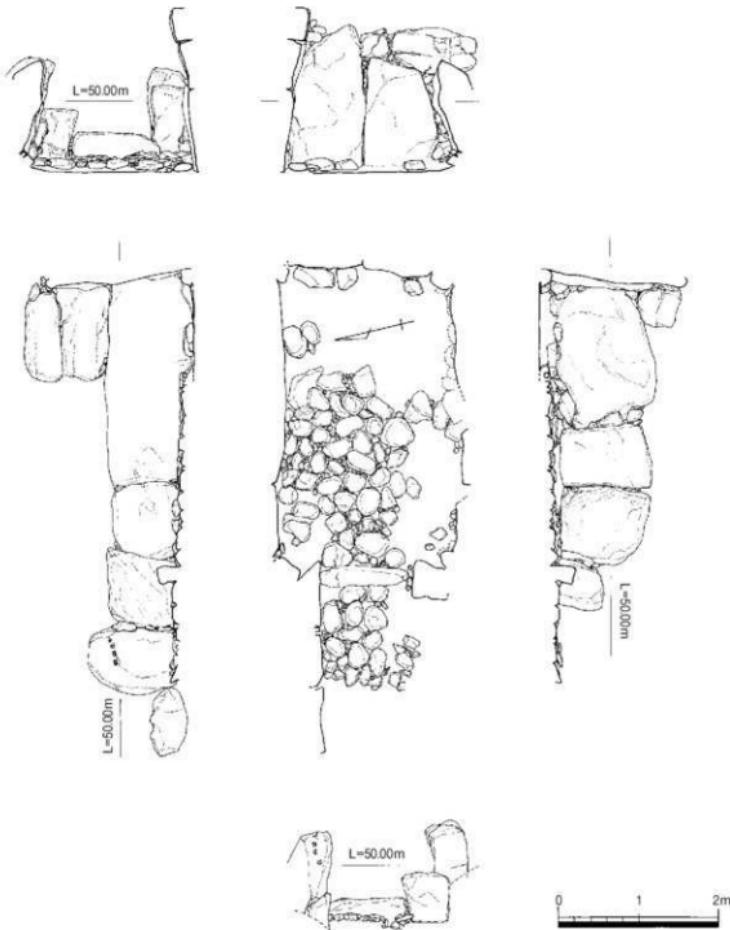


Fig. 6 2号墳石室実測図 (1/60)

羨道部 (Fig. 6, PL. 2)

右側羨道部の側壁は、1石のみが遺存するが側壁腰石の抜き取り穴が確認されており、袖石を含め2石以上存在していたと考えられる。左側側壁は、3石が遺存しており自然石の露頭へとつづいている。3石の中央の1石には、後世石材抜き取りの為に鉄矢を打った痕跡がみられる。

(4) 出土遺物 (Fig. 7, 8, 9, 10, PL. 5)

石室内から出土した土器類は少なく、完形のものはみられなかった。玉類、金属類は比較的多く出土した。中世期の遺物が床面上からも検出される。このことから古墳時代遺物は、元位置をとどめていないと考えられる。

Fig. 8、9は2号墳の石室内から出土した遺物である。1～3は壙蓋である。1は石室内出土の破片

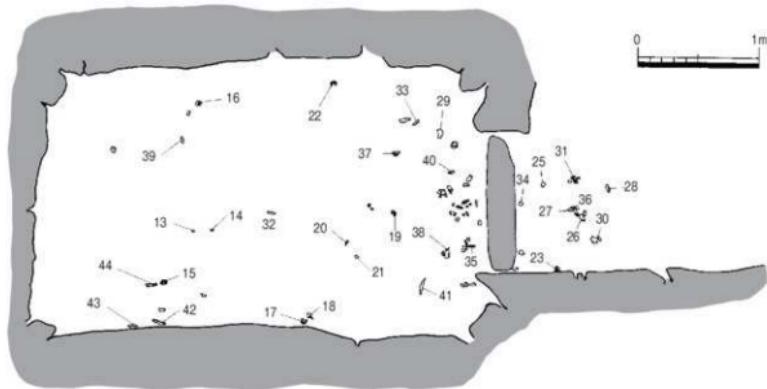


Fig. 7 2号填石室内遺物出土位置 (1/40)

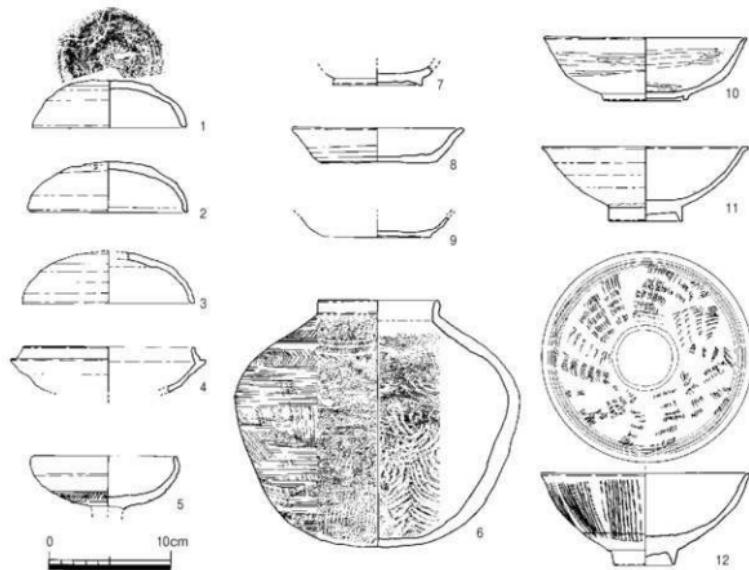


Fig. 8 2号填石室内出土遺物実測図1 (1/4)

と石室内掘削時に上層から出土した破片が接合したものである。口径12.6、器高3.9cmでヘラ記号がある。2は石室内遺物片と墳丘周辺の調査時に出土した遺物片が接合したものである。口径12.8、器高4.1cmである。3は石室内上層にて確認された遺物片と漢道部調査時に出土した破片が接合したものである。口径13.8cmである。4は漢道部調査時に出土した坏身である。口径16.0、受部径12.9cmである。5は石室内埋土上層掘削時に出土した高坏の坏部破片である。口径11.6cm坏部の下方に横

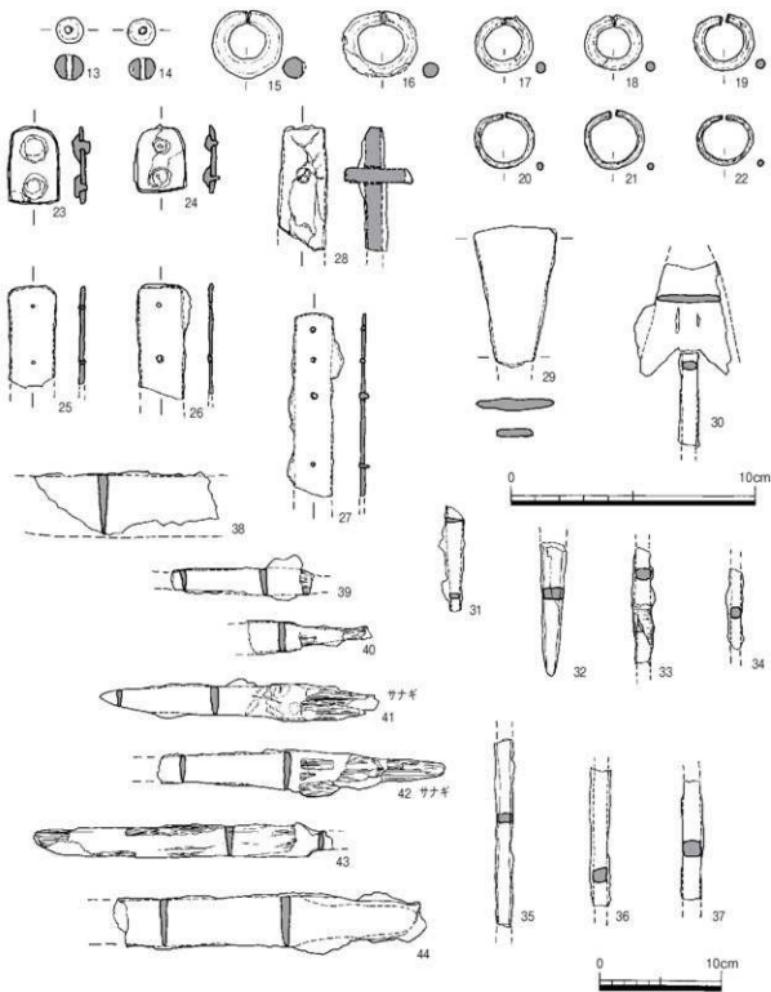


Fig. 9 2号埴石室内出土遺物実測図2 (1/2, 1/4)

歯の列点文が施されており、脚部には3方の透かしをもつ。6は石室内出土の破片が、埴丘周辺、列石周辺、3号埴丘周辺掘削時に出土した破片と接合した短頸壺の破片である。口径9.6、器高20.2cmであり、肩部には櫛歯状のもので連続文が2段にわたって施されている。外面はタタキの後カキ目が残り、内面下位には同心円文が残る。7~12は中世期遺物であり、石室内が当該期に転用されていたことが知られる。7~9は土師器の壺である。7の底径7.4cm、8は口径14.1、底径9.8、器高2.8cm底部外面には静止糸切り痕、板状圧痕がみられる。9の底径は8.8cmである。10は外黒の瓦質。11は白磁碗口径16.8、底径6.1、器高6.2cmである。12は同安窯系青磁碗である。口径18.2、底径5.1、

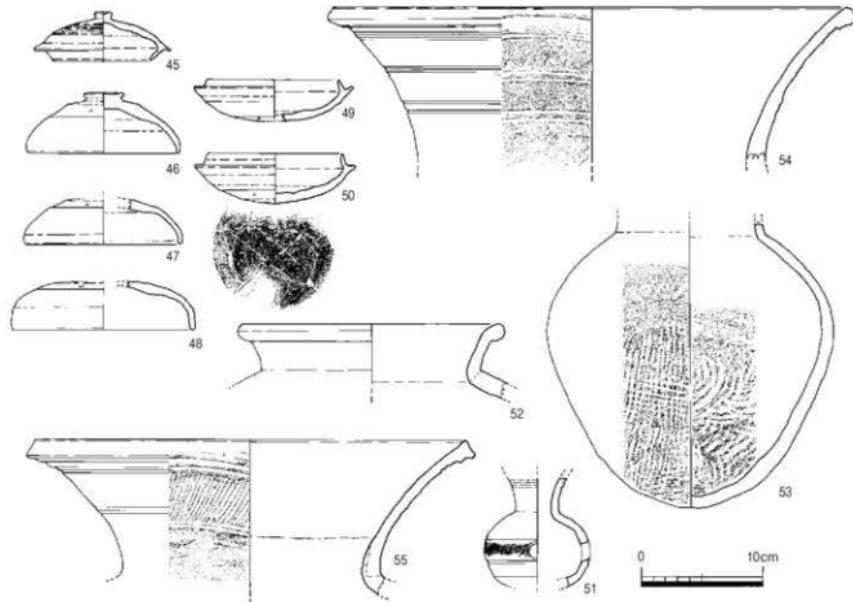


Fig.10 2号墳周辺出土遺物実測図 (1/4)

器高7.6cm。最終的に、玄室内のみで確認された古墳時代土器は存在していない。

図示した玉類、金属類遺物は敷石の間など、すべて床面近くで出土したものである。13、14はガラス丸玉である。濃い青色から紺色を発色している。13の方がやや明るく、径はどちらも11.3mmで、高さは13が9.7、14が8.8mmである。14には横に気泡がみられる。中世期遺物の可能性もある。15～22は耳環である。それぞれの横幅、綫幅、太さは15から (28.7, 26.9, 7.4) (29.5, 27.1, 5.7) (22.9, 21.8, 4.1) (22.9, 21.6, 4.2) (23.9, 23.0, 3.9) (24.4, 23.1, 2.2) (24.1, 23.8, 2.1) (23.0, 20.6, 2.0) mmである。15～19は銅芯に金張りのものである。20～22は無垢の金環である。セットとしては、その大きさ太さから (15, 16) (17, 18) (20, 21) (19) (22) が想定され、このことから最低5人の被葬者数が推測される。23～28は馬具などの帶金具等である。23、24は鉄地金銅張爪形帶金具で、厚さ数mmの薄い鉄板の上下2ヶ所を鋸で固定している。29～37は鉄鎌や鉄製工具。38～44は鉄刀や刀子である。特筆されるものに41と42の刀子に、ハエの蛹痕が付着しているのが顕微鏡観察で確認された。ヒメクロバエは、ある程度腐敗した死肉にたかり、暗闇では繁殖しないという特性をもっているため「殯」が行われたことを示すとされている。玄室内は中世期に転用されているので、どの段階で付着したのかの判断は慎重でなければならないが、注意しておきたい貴重な発見である。

45～55は、墳丘上面など石室部以外で出土した須恵器破片である。45、46はつまみ付蓋である。45の口径は11.2、受部径7.8、つまみ径1.6cmである。46の口径は12.4、器高4.9、つまみ径3.3cmである。47、48は坏蓋である。47は墳丘盛土内から出土した破片である。口径12.8cm。48の口径は14.8cmである。49、50は坏身である。49の口径13.1、受部径10.8cm。50には、ヘラ記号があり口径13.2、受部径11.0、器高4.2cmである。51は脛。52、53は短頭壺。54、55は広口壺である。

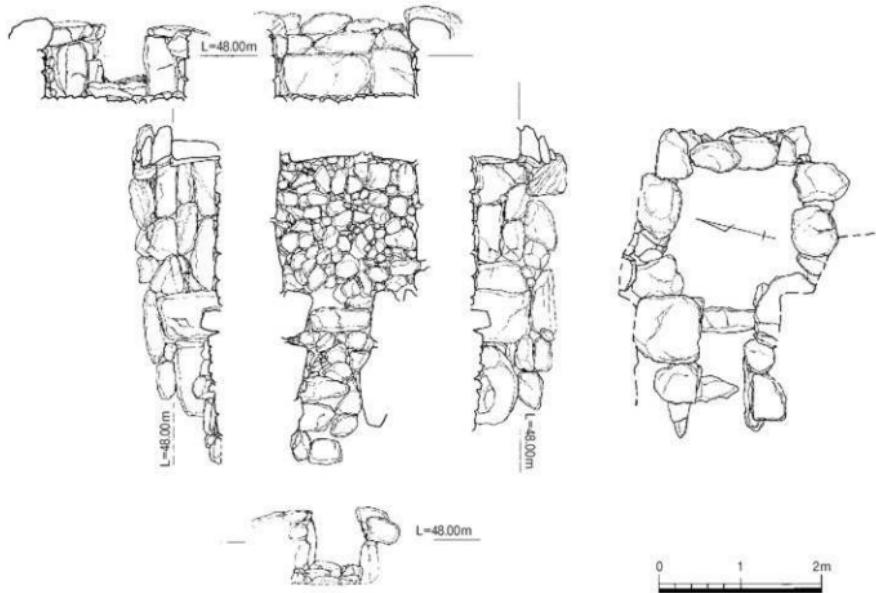


Fig.11 3号墳石室実測図 (1/60)

2. 3号墳の調査

(1) 位置と現況 (Fig. 3, PL. 3)

3号墳は、2号墳の西側に隣接して確認された。数年前の台風時に樹木が倒れ、根が張っていたところが窪みになっていたが、その窪地が3号墳の前部庭であった。「調査に至る経緯」においても記述しているように、調査着手時にはその存在は認識されていなかった。周辺には風倒木が散乱する斜面であり、その可能性は指摘されているものの掘削するまで確証はなかった。

(2) 墳丘 (Fig. 5, PL. 3)

その築造自体が低墳丘のものであり、更に天井石が抜き取られており、その高さや構造に関しては不明である。ただし、平面プランにおいては唯一、2号墳との接合地点から南側に向けて溝状の掘削があり、半径約4.6mの楕円形プランに復元される。

地山成形 (Fig. 4, PL. 3)

Fig. 4 にみられるように西方向から地山を削り込んでいる。2号墳との境界側は溝状に掘削しており、築造当時は明瞭な墳丘盛土がされていたと考えられる。

盛土 (Fig. 5, PL. 3)

調査時は天井石が抜き取られており墳丘の痕跡は遺存していないかった。

(3) 埋葬施設 (Fig. 11, PL. 3, 4)

主軸方位をN(磁北)-104°-Wにとり、西側に開口した両袖横穴式石室を内部主体とする。玄室、羨道部を含めた主軸の全長は340cmを測る。

石室掘方 (Fig. 4, PL. 3)

奥壁側にやや広いプランを呈し、残存する深さは約75cmを測る。

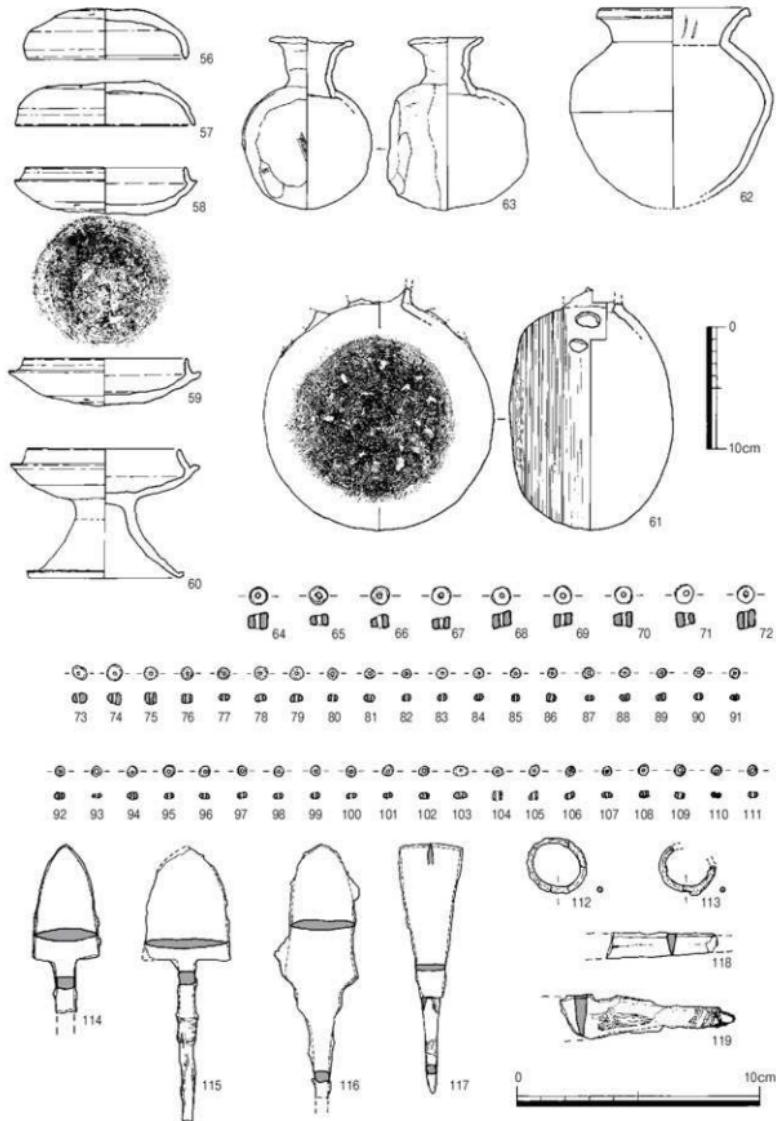


Fig.12 3号填石室内出土遺物実測図 (1/2,1/4)

玄室

奥幅158cm、前幅160cm、右側壁長158cm、左側壁長160cmを測る。奥壁には2石の腰石を配置し、

腰石を含め3段までが遺存している。右側壁には3石の腰石を、左側壁には2石の腰石を配置する。右側壁は腰石を含め3段まで、左側壁は4段目までの積み上げが遺存していた。玄室床面には20~30cm大の扁平な河原石と割石を用いて敷き詰められている。

羨道部

右側羨道部の側壁は、袖石を含め2石が遺存していた。床面には玄室に用いられているものよりも大きめの割石が散かれている。

(4) 出土遺物 (Fig. 12, 13, 14, PL. 6)

図示した56~119が石室内床面から出土した遺物である。玄室右袖隅角と羨道部左側壁からは、まとまった遺物が出土した。56~62は玄室右袖隅角から出土した須恵器である。56, 57は壺蓋である。56はやや赤褐色を呈し、口径は13.1、器高4.1cmである。57は口径14.4、器高3.7cmである。58, 59は壺身である。58もやや赤褐色を呈し、底部外面にはヘラ記号がある。口径14.8、受部径13.1、器高3.7cmである。59の口径は15.7、受部径13.3、器高3.9cmである。60は高壺。口径15.4、受部径12.4、底径10.3、器高10.6cmである。61は提瓶。頸部と釣手が欠損している。体部全体にカキ目が施され、扁平側胴部には指頭圧痕が円を描くように残る。胴部の最大径は18.6cmである。62は壺である。焼成が不良で、灰白色を呈する。胴部の最大径はやや上位にあり、口縁端部を折り返している。口径12.2、器高16.4cmである。出土状況は右袖隅角に60の高壺を置き、その右側に62の壺を、側壁側に提瓶を置いていた。壺の56と58を合わせ高壺の上に、59の壺身は壺の上に、57の壺蓋は上にむけて壺の前に置かれていた（裏見返し参照）。すべてほぼ完形に復元することができた。

玉類は玄室内敷石の間、または下から出土した。64~72は滑石製の白玉である。径は7.1~7.8mmであり、長さは3.8~8.2mmである。筒状の外面は精緻に削られているが、上下の端部が斜めになっているものが多く、管状のものを切断して製作したと考えられる。73~111はガラス小玉である。青~青緑色を呈する。図示していないが、小玉は破片のものが数点ある。径は4.0~6.5mm、長さは1.8~4.9mmである。112, 113は、敷石の下から出土した細い銅芯の製品で、腐蝕が著しい。芯の太さは現状で112が2.3mm、113が2.2mmである。耳環と思われるが、開口部の状況は不明である。

羨道部左側腰石の間に63の小型横瓶が入れられていた。63は手づくね風で器高14.1、口径約6cmである。その前面には114~117の平根鉄鎌と119の刀子が集中し

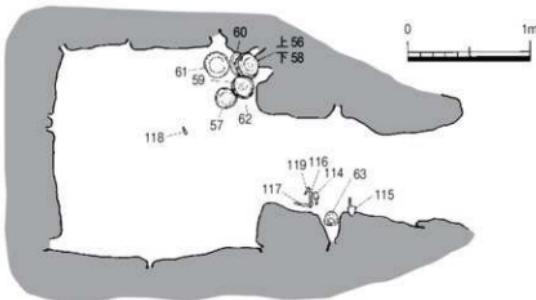


Fig. 13 3号墳石室内遺物出土位置図 (1/40)

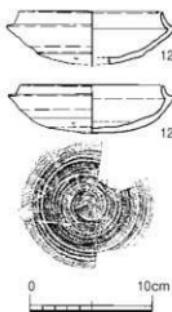


Fig. 14 3号墳墳丘出土遺物実測図 (1/4)

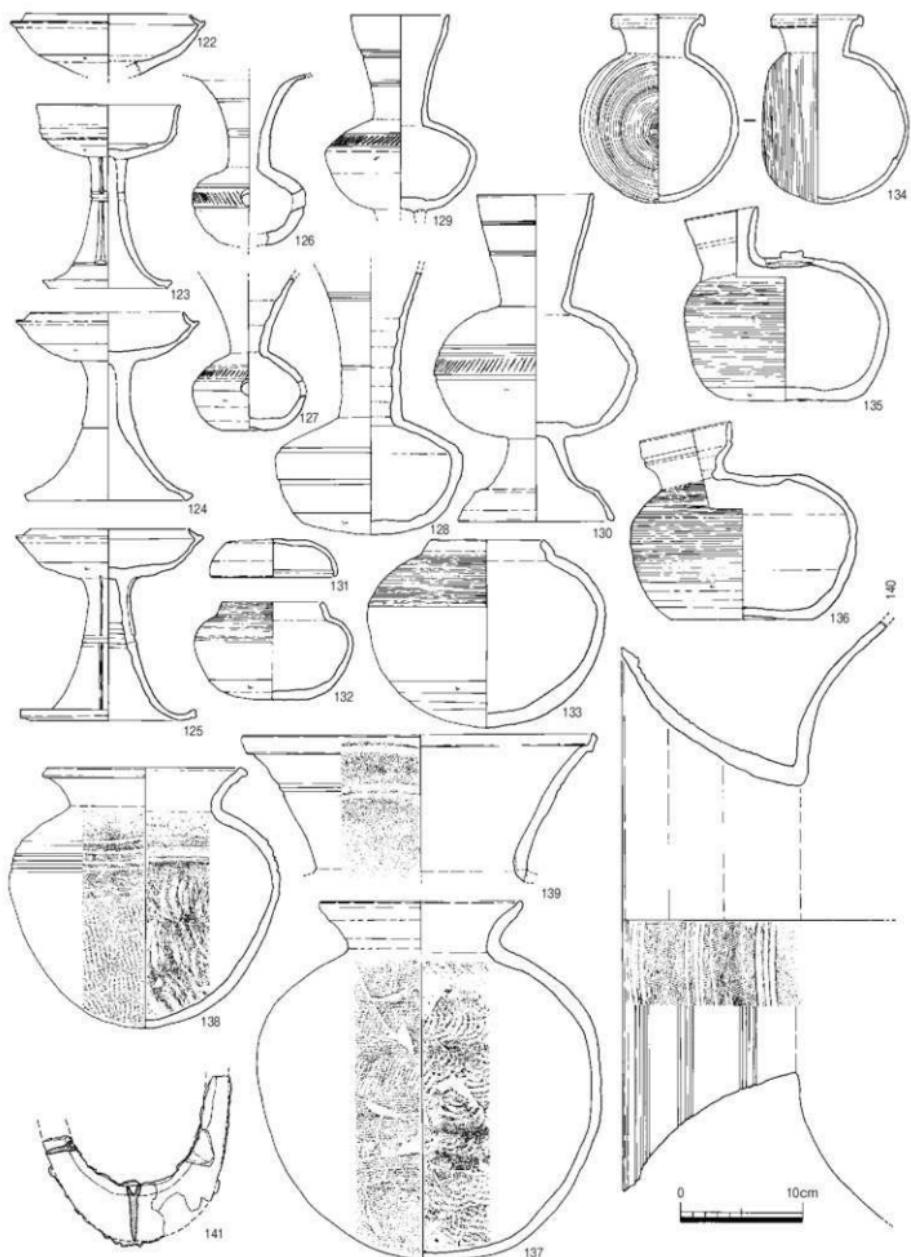


Fig.15 2号墓道3号周溝部出土遺物実測図 (1/4)

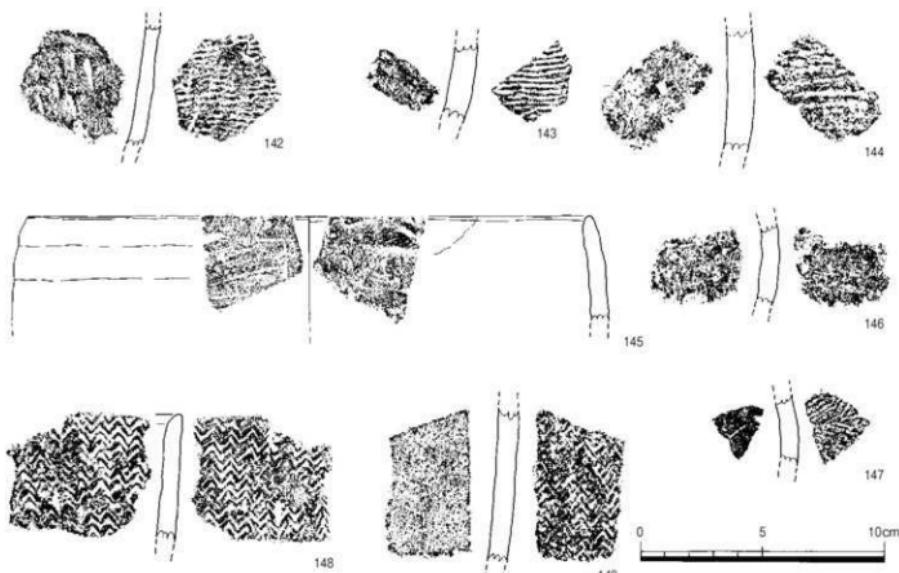


Fig.16 調査区周辺遺物 (1/2)

て出土した。115の柄部には矢柄を装着したと思われる糸状の繊維痕跡がみられる。117の柄部には矢柄の痕跡と思われる木質が付着している。また、119の刀子の柄には僅かに繊維質の付着物と柄の木質が遺存する。118は刀子の柄部と思われ、玄室内敷石上面より出土した。

(Fig. 14) 120、121は、3号墳の北側現地表土内から出土した遺物である。120の坏身破片の口径は13.9、受部径11.2cmである。121の坏身片の底部外面にはヘラ記号があり、口径13.6、受部径11.6、器高3.9cmである。

2号墳と3号墳間の溝は、3号墳壇丘築造時に2号墳と明瞭に範囲を画するために掘削されたものと推測されるが、この覆土から多くの遺物が出土した。(Fig. 15) その多くは、後世2号墳の石室を再利用する際、石室内に副葬されていた遺物を焼き出し、廃棄したものであると考えられる。122は坏身であり、口径16.2、受部径13.4cmである。123～125は高坏である。123には受部が無く口径11.6、底径9.6、器高17.9cmである。脚筒部の中央には2条の凹線が巡り、それを挟んだ上下に透かしを三方に配する。124は口径15.1、受部径12.3、底径12.8、器高15.4cmである。脚筒部の中央に1条の凹線が巡る。透かしはない。125は口径15.5、受部径12.8、底径14.4、器高15.7cmである。脚筒部の中央には2条の凹線が巡り、それを挟んだ上下に透かしを三方に配するが、上段の1本は開いていない。126、127は甌。どちらも口縁端部が失われている。126の胴部穿孔部分には1条の櫛歯の列点文が施され、127では胴部穿孔の上方に1条施される。128は長頸甌。頸部の下方に1条、上方に2条の凹線文が巡る。129、130は台付長頸甌である。129の脚部は失われており、肩部には櫛歯による連続文が施されている。口径は8.0cmである。130には胴部最大径にあたる部分に櫛歯の連続文が1条巡る。口径9.6、底径12.8、器高26.7cmである。131は甌蓋である。口径10.2、器高3.1cm

であり、口縁内側に段を有する。132、133は短頸壺。132は小型のものであり、口径8.3、器高8.0cmである。胎土、焼成などからも131の蓋とセット関係にあったと考えられる。133の口縁端部はやや内湾しており、その口径は9.1cm、胴部最大径19.5、器高15.3cmである。破片の一部は2号墳石室上層出土遺物と接合した。134は提瓶。口径7.2、器高15.5cm、直径12.8cmの円形体部をなす。体部のほぼ全面にわたってカキ目を施す。135、136は平瓶。135の口縁は直線的に延び口径6.2cm、底は平たく底径10.3、器高15.8cmである。体部全面にカキ目を施し、上部には直径約2cmのボタン状の粘土塊を貼り付けている。136の口縁は一度段を有して直線的に延びる。口径7.6、底径11.6、器高16.2cmである。体部全体にカキ目を施し、上方に粘土塊を貼り付ける。接合破片の1片は2号墳埴丘の上面から出土した。137、138は壺。137の口径は16.5、胴部最大径は28.2、器高29.6cmである。外面にはタタキの後カキ目を施し、内面には同心円文が残る。焼成がやや不良で灰白色を呈する。138の口径16.8、器高21.4cmである。外面はタタキの後カキ目が残り、凹線が4条めぐる。焼成がやや不良である。139、140は広口壺。139は頸部の破片で、口径は41.8cmである。外面には凹線が巡り、波状文が2段にわたって施される。140は壺上部の破片である。口径は44.4cmであり、頸部に櫛歯によるカキ目を施した後、凹線文をめぐらしている。141はU字形鉄製鋤先である。腐蝕が著しいが断面はY字形を呈する。

(5) その他の遺物

今回の調査では古墳2基の調査を行ったが、現地表土の剥ぎ取り時、ないしは墳丘掘削時などにおいて縄文時代遺物が採集された。その遺物を図示する。(Fig. 16, PL. 6) 142~144は撻糸文土器。145~147は無文土器。148、149は山形文土器。縄文早期押型文期の遺物である。古墳時代、古墳の構築に伴いこの地の地形は大きく変えられた。それ以前には、縄文時代人の活動の痕跡が遺存していた可能性が高い。

3.まとめ

今回の調査では、2基の古墳の調査を行った。荒平古墳群にはA群からL群まで分かれているが、発掘調査は今回が初めてのものとなった。墳丘の立地関係や出土遺物から2号→3号墳という構築順と考えられる。2号墳は、石室構造も大きく荒平古墳群内でも大型のものであろう。また、狭道の前面に地山内の自然石を取り込んで構築されている点は外護列石の配置から明らかであり、大きな特徴と言える。耳環の数から5体以上の被葬者の存在が想定されるが立地や石室の大きさ、残存する副葬品の状況から、比較的上位ランクの階層にみられる直系家族集團が被葬者となっていると考えられる。

敷石に使用された河原石は早良平野を北流する現在の室見川のものであろうことからも、現在古墳から見渡すことの出来る早良平野内で活動する集団の墓であろうと考えられる。

3号墳の建造時、2号墳はまだ追葬されている状況だったのかどうかは不明であるが2号墳と3号墳間の溝は、3号墳建造時に掘削されたと考えられる。この溝の埋没時には大量の2号墳石室の副葬品と考えられる遺物を含む。遅くとも13世紀の中世段階に石室内は再利用されており、大きな擾乱を受けている。その後、近世後半以降天井石などが抜き取られたと考えられる。

3号墳は、天井石などは抜き取られていたが、石室の規模などから低墳丘の小型墳と考えられる。床面上の埋葬状況が良好に遺存しており、当時の埋葬状況を知ることができ研究の深化に貴重な資料となつた。



1) 調査前状況（南東から）



2) 2号墳調査前状況（北西から）



3) 2号墳全景（西から）



4) 2号墳羨道前状況（西から）



5) 2号墳石室全景（西から）



6) 2号墳玄室全景（西から）



7) 2号墳玄室内遺物出土状況（北西から）



8) 2号墳玄室内遺物出土状況（南西から）



1) 2号墳石室調査状況（西から）



2) 2号墳橋石検出状況（西から）



3) 2号墳奥壁状況（西から）



4) 2号墳玄室右側壁状況（北から）



5) 2号墳玄室左側壁状況（南から）



6) 2号墳埴丘土層（西から）



7) 2号墳外縁列石検出状況（南東から）



8) 2号墳南側斜面断割り状況（北東から）



1) 3号墳確認状況（南東から）



2) 3号墳調査状況（南西から）



3) 3号墳全景（南西から）



4) 3号墳玄室全景（南西から）



5) 3号墳周溝検出状況（東から）



6) 3号墳周溝土層堆積状況（北から）



7) 3号墳羨道完掘状況（南西から）



8) 3号墳羨道左側遺物出土状況（南東から）



1) 3号墳全景（北東から）



2) 3号墳右袖遺物出土状況（北東から）



3) 3号墳右袖遺物出土状況（北から）



4) 3号墳右袖隅角遺物取り上げ状況（北から）



5) 3号墳羨道部状況（南西から）



6) 3号墳玄室右側壁状況（北西から）



7) 3号墳左側壁状況（南東から）



8) 3号墳羨道状況（南東から）

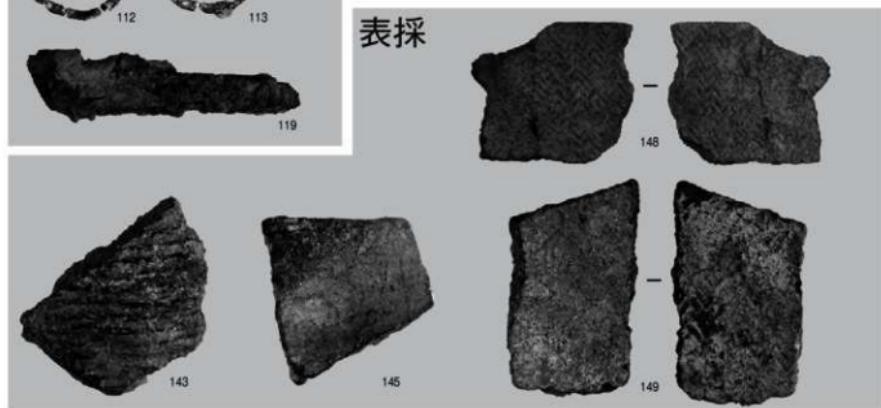


出土遺物（縮尺不統一）

3号墳



表採



出土遺物（縮尺不統一）

— 報告書抄録 —

書名	荒平古墳群 1
ふりがな	あらひらこふんぐん 1
副書名	E群 第2号墳・第3号墳調査の報告
卷次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1023集
編著者名	加藤隆也
編集機関	福岡市教育委員会
発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	20090331
作成法人ID	40130
郵便番号	810-8621
住所	福岡市中央区天神1-8-1
遺跡名	荒平古墳群 E群
ふりがな	あらひらこふんぐん Eぐん
遺跡所在地	福岡市早良区東入部2丁目16番17号
市町村コード	40130 遺跡番号 0357
北緯	33° 31' 07"
東経	130° 20' 11" (世界測地系)
調査期間	20070702 ~ 20070818
調査面積	古墳2基
調査原因	養護老人ホーム建設
種別	古墳
主な時代	古墳時代
遺跡概要	古墳2基
特記事項	荒平古墳群内では、大型の古墳であり、羨道の前面に露頭の自然石を利用



3号墳玄室右袖遺物出土状況復元



建築物完成写真

荒平古墳群 1

－E群・2号墳・3号墳調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1023集

2009(平成21)年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印刷 株式会社 伸和
福岡市東区社領2-7-4

ARAHIRA-E MOUND BURIALS

The Report of Archaeological Investigations of The Ancient Tumulus,
ARAHIRA-E Mound Burials, in Fukuoka city



2 0 0 9

THE BOARD OF EDUCATION
OF FUKUOKA CITY
JAPAN